



利特
門 20
卷 51



~12
20
1-51



Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, covering the left page of the manuscript. The text is densely packed and follows the curve of the page's binding.

若紫

源氏十七卷の三月よりをまわすの事

以歌為卷也 多末流をくつりてとるんは束のね

つらひをる地をたぬまは奇あしるもろしあは

つらひをる地をたぬまは奇あしるもろしあは

其内偏舉則或上或下云云 けをい相違或下あへ

死武部口の非君と紫れとあつる侍と藤壺の女

侍乃ゆり尋かそをにざりてくはとげは巻小秋の夕

魚を仰てかのを向好くわりみさへ人乃出あら

小をりけくちなりなるゆかりもるまねきをも

まらり孫ふね人ーとあり 師は世上の事とけを

くしてんんんんんんんんんんんんんんんんんん

ワハヤ... 源氏十七卷

わらやまはわづらひあてふらびよまどなひひら

あひらう... 加持の真言教陀羅尼の事

あひらう... 是杜子春が

あひらう... 花御教云子璋鶯脰血糝糊手捏擲還崖丈夫

あひらう... 向馬寺

あひらう... 柳川

あひらう... 昔は十九流ありはほほ地云云

あひらう... 六帖の多く引

あひらう... 五人

あひらう... 花

治了大佛位
 位下及身伴
 子武智丸
 相武云云
 宇道東寺
 行事同所
 用馬於河
 原放火
 行登此山
 始建此寺
 云水浸云延
 一十六年

三月のつごもりなれば京の宮ざり
 るに三月のつごもりなれば京の宮ざり
 もていふすうまゝは霞のさすまひもあしう
 るに三月のつごもりなれば京の宮ざり
 もていふすうまゝは霞のさすまひもあしう
 るに三月のつごもりなれば京の宮ざり
 もていふすうまゝは霞のさすまひもあしう

名伊路人と云人等許の体の四列つたてりて
 世々わたりて 時氣く司天在山の運氣
 人々をいふと 俗記 世に呪詛のあつた
 いふと 俗記 世に呪詛のあつた
 老死 老死 老死 老死
 老死 老死 老死 老死
 老死 老死 老死 老死
 老死 老死 老死 老死



死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死
 死 死 死 死

仙宮酒善住西天石窟 取書之

集山 澤云余の家
家有一室
中无一物

たほのまのうら

のゆりのそと 誰ともあはせ 路をすげといふ
やつれぬれど ちるさな ぬきぬれぬあかり
わ二日め ゆいも ちかり すすんいまたは

ひんやり せの

もすて すすれて ゆるをいり ぐり あり あり

向年 老て

つら せの ぬきぬれぬあかり

ををせ

つら せの ぬきぬれぬあかり

世に 入ると

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

つら せの

つら せの ぬきぬれぬあかり

Handwritten text in German, including the title "Der Herrscher der Welt" and several lines of prose. The text is written in a cursive script with some red ink annotations.

Handwritten text in German, continuing the narrative or commentary. It features dense cursive handwriting with red ink highlights and marginal notes.

けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり

けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり
けつとんした 修治の信のふり 美れなるか 修治の信のふり

隆奥出程の梅舟役のよき動

ついでに...
京ももろぞねむみし...
所

おしめ...
おしめ...
おしめ...

のまへ...
のまへ...
のまへ...

年...
年...
年...

もれ...
もれ...
もれ...

ひ...
ひ...
ひ...

わ...
わ...
わ...

つ...
つ...
つ...

や...
や...
や...

な...
な...
な...

く...
く...
く...

お...
お...
お...

さ...
さ...
さ...

あ...
あ...
あ...



女まてぞうれよつまやもれさひのぬへーよな

とこまの

ひ十有五年

の海をうら

よりいの事

尾まの老の哉

ままの敬

とて

と後仰て林

ひくくうん

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

んまのうらひのすあまのぬへーよな

ままの敬

とて

と後仰て林

ひくくうん

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

まよひて

此三昧正受法也
華嚴法ハ
智者大師取行

此三昧正受法也
華嚴法ハ

一はもれどいふはたけのさきにて
 けつこのまふれおぼつたふまふま
 のびどまふさるおぼくづぐざむひみん
 うらさへしくなる心のほどをぬんぞしてさる
 めんどいづけはなるこまふまふま
 おぼへてまけらるる人まらへ僧おこ
 ちれおぼくおぼく
 此三昧正受法也
華嚴法ハ
智者大師取行

此三昧正受法也
華嚴法ハ

一はもれどいふはたけのさきにて
 けつこのまふれおぼつたふまふま
 のびどまふさるおぼくづぐざむひみん
 うらさへしくなる心のほどをぬんぞしてさる
 めんどいづけはなるこまふまふま
 おぼへてまけらるる人まらへ僧おこ
 ちれおぼくおぼく

瑞華の瑞

ぬるれのうねをさうくねとくちりさくさくさくさく

瑞華の瑞

のずぶのうねのさうさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞華の瑞

さうさくさくさくさくさくさくさくさくさく



お山の松の

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

瑞華の瑞

のりまの 伯牙鼓琴 而六馬作 三昧

鳴鶴 躍而 遊矣 列子

仲は心の六 傍傍 傍原

心と云切く 心と云切く

あせしよを 心と云切く

傍傍の傍 傍傍の傍

あせしよを 心と云切く

あせしよを 心と云切く

あせしよを 心と云切く

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

ほろとて 一まきしとまきし

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

夢に 女詞 及 色の 女席

のりまの 伯牙鼓琴

鳴鶴 躍而

遊矣 列子

仲は心の六

傍傍 傍原

心と云切く

あせしよを

傍傍の傍

あせしよを

あせしよを

おるやけはあちりーあされざらけつこもーいーい

がりの路くもりりあかものまらりあひもてあじ

くへーもーあひもつれどーのびらあありをれ

いふとあひもらりてたんのどやらりー二日

うらやすさあへんやわてあどかりつあまら

んとーあひもらりてたんのどやらりー二日

あせしよを 心と云切く

あせしよを 心と云切く

あせしよを 心と云切く

あせしよを 心と云切く

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

た本に詞

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

王命婦と弁とを命のこころ
よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...

よめを命知らぬの弁の命婦
わらわに...



十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日

十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日

十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日

十月十日

十月十日

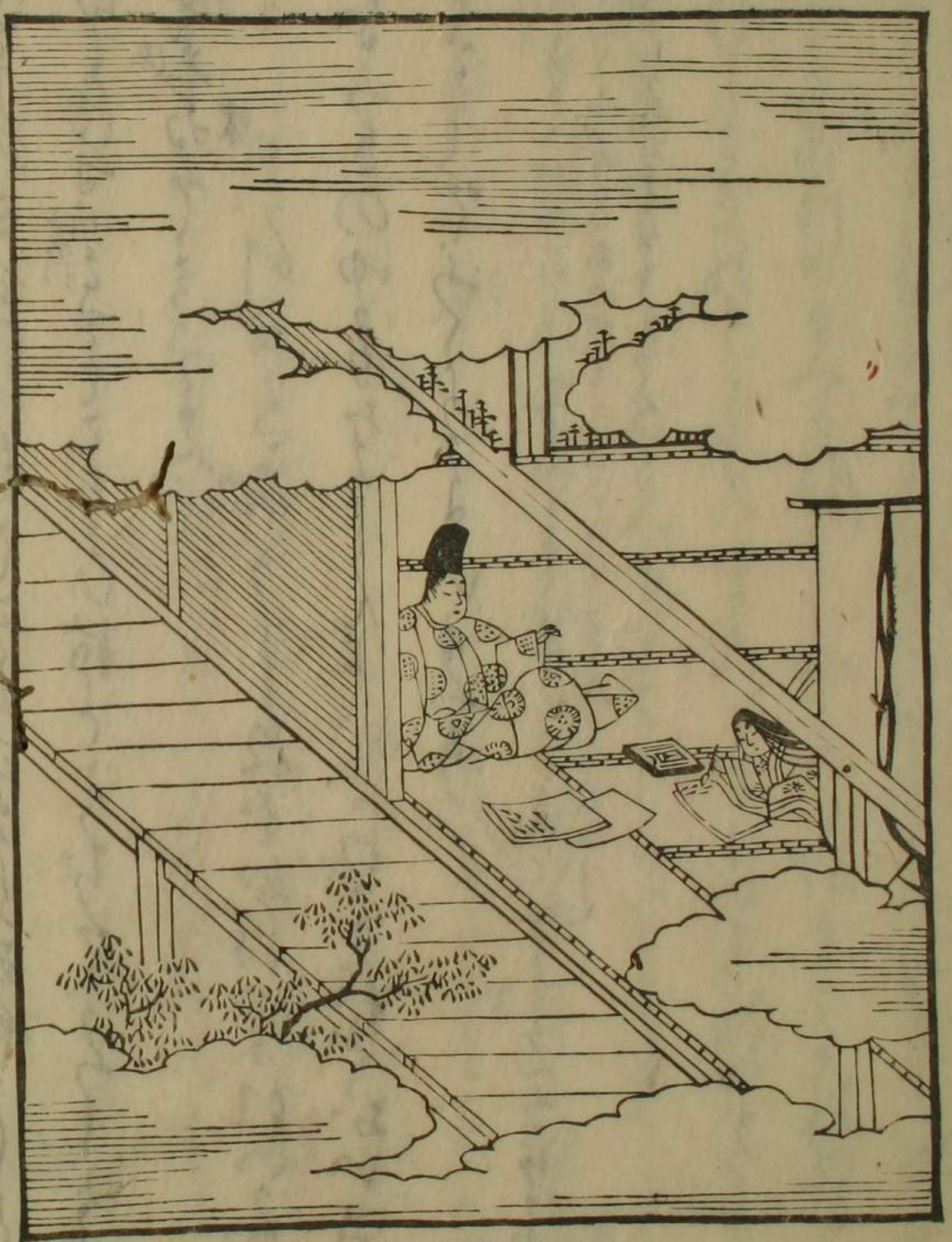


けりて
 りさねのま
 けりて
 づさつて
 ン地を
 ーとち
 けりて
 けりて
 の文
 ぬつて
 の入

けりて
 りさねのま
 けりて
 づさつて
 ン地を
 ーとち
 けりて
 けりて
 の文
 ぬつて
 の入

藤原

十一



二あまぶみよぞうりけりまゆり
ほふ ほふのまはるひの あまの

ひめあごわぎもやどもつかりづけてもろを
こころのゆふ あまの あまの

はあまびつゝまなまをいれぬひのあまご
あまの あまの

てぞまびあへりけりいづるいよまあせごと
あまの あまの

がさめやりつゝあゆもまがずお細まがめて
あまの あまの

りふらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
あまの あまの

かきつふき
さんとしら
きよしのひさ
はつと御経
んとあはれ
そなたが
ていせい
かまをせし
わんごう
まかゆ
んまを
ていせい
まのせい
あまご
おほの
おき
のせい

かきつふき
さんとしら
きよしのひさ
はつと御経
んとあはれ
そなたが
ていせい
かまをせし
わんごう
まかゆ
んまを
ていせい
まのせい
あまご
おほの
おき
のせい

かきつふき
さんとしら
きよしのひさ
はつと御経
んとあはれ
そなたが
ていせい
かまをせし
わんごう
まかゆ
んまを
ていせい
まのせい
あまご
おほの
おき
のせい

かきつふき
さんとしら
きよしのひさ
はつと御経
んとあはれ
そなたが
ていせい
かまをせし
わんごう
まかゆ
んまを
ていせい
まのせい
あまご
おほの
おき
のせい

曰者民之辞也謂之父母者指其恩育而言親之之意謂之王者指其長而言尊之意又
詩小雅樂只君子民父母也

それともあつてもやめんまは云西文の所を修すの儀なりと伴別由席平と云相
人こそ客自人こそをせんれつういふもかたうき人とみよしかめりあつたうと云
若相ありと云く論ふもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

そのさうたがう一 嘆むやあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう
あつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたうと云くもあつたう

